

James A. Schellenberg, Masters of Social Psychology, Oxford Univ. Press, 1978

No. 2. (前年度『研究紀要第10号』より継続)

押 谷 由 夫

II ジグムント・フロイトの精神分析

精神分析の起源

ジグムント・フロイトは、心理学者になろうと思ったことは一度もなかった。ましてや社会心理学の領域に貢献することなど、——まったく晩年になるまで——考えもしなかった。彼は神経異常の治療を専門とするウィーンの一医者にすぎなかった。この活動が、社会行動を考えるうえでまったく新しい方法を導こうとは、フロイト自身、この仕事を始めたときには、想像すらしなかったのである。

事実、フロイトは、開業をはじめたとき、すでに30歳になっていた。そうした理由も、もとはといえば、学問上というより金銭上のものであった。4年の婚約期間の後、フロイトは、マルタ・ベルナイス (Martha Bernays) と 1886年春結婚した。彼は、妻と始める新しい家庭と同時に、両親へのしおくりをも用意する必要があった。まさにこのとき、ジグムント・フロイトは、よりよき金銭上の安定を求めて、開業医として自分の仕事にのりだしたのである。

フロイトはすでに一線の生理学者、神経解剖学者として名をあげていた。彼は、ウィーンの総合病院で青年医として勤めており、近々ウィーン大学の非常勤講師を約束されていた。彼の興味を中心は、神経系の有機的疾患にあった。すでに、延髄 (medulla oblongata)——呼吸や循環のような生の機能を規則正しくする脳の基礎部分——の機能の解明や、神経系に及ぼすコカイン薬の効果の研究に重要な科学的貢献をなしていた。

しかし、フロイトが総合病院で働く賃金では、2つの家族を養うことはできず、それはむしろ、以前の生理学教室での仕事よりも不十分なものであった。そこで、1886年に彼は、将来を期待できる科学者としての職業から、金銭上より多くの報酬が期待できる開業へと方向転換したのである。

開業医としてのフロイトの最初の業績は、大きな評価をえるほどのものではなかった——少なくとも、ウィーンの地方開業医が関心をもつ限りにおいて。神経病の個人治療という自分の仕事を始めるのに役立てようと、彼は、前年の冬、パリのシャルコー (Jean Martin Charcot) のもとで研究生活を送った。当時シャルコーは精神病治療における独創的業績によって世間に広く知られていた。彼はちょうど特にヒステリー症状に関心をもっていたときであり、この感情の乱れと身体症状とが奇妙に混ざりあっている病気に対し、生理的状况よりもむしろ心理的動因を重視していた。さらに、シャルコーは、その治療に催眠術を使用した。フロイトは、シャルコーの療法の主要なものをウィーンにもち帰った。ウィーンでは、依然として、ヒステリーは主に生理学的な不安である、と考えられていた。

フロイトは、ヒステリー治療によって、ウィーンの開業医として有名になる機会を得たのである。しかしながら、彼がシャルコーの業績を報告したとき、医学の地方指導者達は、不信がるか、無関心か、のどちらかであった。大胆にも、フロイトは、研究をさらに進めて、男性にもヒステリーのケースがあるのを確かめたり（それまで女性で診断するのみであった）、暗示によってヒステリー症状をおこそうとしたのである。それらの行為は、いずれも、ヒステリーに関してウィーンで普及している説を否定するものであった。しかし、それらの業績はほとんど注目されなかった。実際、以前にはフロイトの説を大旨認めていた仲間達でさえも、受け入れを拒否することがしばしばあった。フロイトは、それからというもの、ウィーンの形式ばった医者仲間とは、一般に接触しなくなった。そして、ほとんど自分自身の開業に専念したのである。

フロイトの新しい考えに同調した地方開業医の一人にジョセフ・ブロイアー (Josef Breuer) がいた。実は、ブロイアーはヒステリーの治療に長年催眠術を使用していたのである。1つの特に興味あるケースを、フロイトは、シャルコーのもとへ研究に行く前に、ブロイアーから聞かされていた。フロイトはパリから帰ったとき、数年も前に扱われたこのケースの詳細をブロイアーに尋ねた。それは、自分の重病の父を看護している間に病気になってしまった若い婦人のことであった。その病気は麻痺と精神の錯乱という形態をとっていた。たまたま、ブロイアーは、患者が高ぶった感情を話したのち、錯乱状態が弱められるのを発見した。また、彼は催眠術の中で、彼女が自分の症状と、以前、父とともに経験した状況とを明確に結びつけているのを見いだした。しかも、催眠術によって、症状と結びつけられた感情を自由に表現しているとき、その症状は、しばしば消失したのである。

後、自分の仕事をふりかえりながら、フロイトは、精神分析の起源を、このケースと、それをとり扱いながらブロイアーが開発した治療の方法に求めた。ブロイアーは催眠術を用いしたが、彼の成功の鍵は、自分の患者に悩んでいることを“思いのままに語らせる (talk out)”方法にあるように思われた。この“カタルシス的 (cathartic)”方法は、フロイトに受け継がれた。彼は催眠術をかけて後、患者に、病気の特定の症状と心理的に関連していると思える経験について話すよう求めた。フロイトは、このアプローチで成功をおさめた。もっとも徐々に彼はこの方法で催眠術を使うことに制限を加えるようになっていた。

しばらくの間、フロイトとブロイアーは、親密な同僚として仕事を行った。彼らはお互いにカタルシスの手法を使って得た資料をわけもっていたし、共同で自分達のアプローチに関する論文を書いてもいた。『ヒステリーに関する研究』という彼らの本が、1895年に出版された。しかし、この研究が世に出たころから、彼らの関係は、つめたくなっていた。ブロイアーは一般業務に非常に多忙であった。かつ、彼らがヒステリーを解釈する方法に若干の専門上の違いがあった。——たとえば、ブロイアーは、フロイトが行う以上に、生理学的解釈を行った。しかしながら、フロイトは2人に亀裂が生じた最も根本的な原因は、性に関するとらえ方が異なっていることだと考えた。

1892年ごろ、フロイトは、彼が最初に“集中技法 (concentration technique)”と名づけた新しいアプローチに対して催眠術の使用を放棄した。しばらく彼は、催眠術を考案した医師に信頼がもてなくなり、カタルシスを達成させるより自然で直接的な方法を探っていたのである。集中技法によって (催眠術を使うことなく)、彼は患者が症状と結びついた

経験と呼び起こせることを強調した。しだいにこれは、患者を単純にリラックスさせて、どんな考えでも自然に浮かんできたものをのべさせる、という“自由連想 (free association)”の技法へと発展した。何であろうと患者によってのべられたことは、彼らの不安のもとを探る有効な手がかりとして考えられた。フロイトは、自由連想を使用しながら、一段と、ノイローゼにおいては、性的要因が最も重要であるという確信を持つようになった。たとえば、彼は、まもなく、たいていのヒステリー症状を理解する鍵として、性的葛藤を認めている。これは、プロイアーとは相いれぬ結論であった。

プロイアーもまた、治療中の患者が医師にあらわすようになる激しい感情をとりあげようとはしなかった。彼は、フロイトが行ったように、これを人間的結びつきの初期形態への回帰を示すものであると認識してはいたが、現在の結果に容易に結びつけることはできなかった。“転移 (transference)” (過去を探ることで明らかとなる事柄にまつわる感情的価値を医者に対してもつようになる) の現象はフロイトの治療の中心的なものとなっていた。後、プロイアーの風変わりなケースをふり返ってみたときに、フロイトは、かつての親密な友と意見が食い違った最大の理由がわかったように思えた。プロイアーは、このケースに含まれた転移の性的内容を読みとることができなかった。逆に、かすかにかい間見たものに不快を感じて、その治療に不意の結論を下したのである。

皮肉にも、後、フロイトは、自分が最初いかにしてノイローゼの性的病因説を考えるに至ったかを述べる中で、数年前のプロイアーとの1件から、決定的なインスピレーションをうけていると報告した。フロイトとプロイアーが通りを歩いていたとき、1人の男が近づいてきて、プロイアーと口論を始めた。その男がさって後、プロイアーはフロイトにその男の妻について簡単に説明した。彼は彼女をノイローゼのケースとして治療していた。彼は、そういうケースは、常に性生活上の問題であるという説明で結論づけた。この偶然の説明が、プロイアー自身は見落していたけれども、彼のより若き友には深い印象を与えたのである。(Freud 1914、再版1957 11~12頁)

セラフィーの1方法としての精神分析は、フロイトが自由連想を開発するもとなったプロイアーのカタルシス的方法によって考案された、といえるかもしれない。フロイトはまず1896年に自分のアプローチに対し、“精神分析 (psycho-analysis)” という用語を用い、その後完全に催眠術の使用を放棄している。フロイトによって早期に開発されたもう1つの重要な技術は、いわゆる夢分析である。自由連想と夢分析は、精神療法に対するフロイトの2つの基本的な貢献なのである。

深層 (Depths) の解明

1896年秋、フロイトの父は、81歳で亡くなった。ジグムント・フロイトは、そのとき40歳、医者の仕事もうまく軌道にのっていたし、自分の家庭ももっていた。そのときまでにフロイト夫妻には、全部で6人の子どもが生まれていた。フロイトは、幸福だったし、夫としてまた父として、自分の役割を十分に果たしていた。にもかかわらず、彼は、自分自身、父の死に激しく動揺しているのが読みとれた。その後、ベルリンの友達に手紙を出した折、「私は今、あたかも根こそぎずたずたに切りさかれたかのように感じている」と書いたのである。(コスチガン 1965、47頁より引用)

フロイトは、父の死が与えた影響の大きさに驚かされた。自分自身の反応を理解する助けとして、翌年の夏、自らの精神分析をはじめた。対象に対して、彼は、とくに自分の夢

をふり返ってみた。彼は自分の患者が話す夢は、無意識の世界を知る鍵となることに、挫折気づいていた。今や自分自身の夢の中で、その重要性を強く確信したのである。彼が後に説明しているとおり、夢は無意識界理解への王道となった。

これ以後の2年間は、おそらくフロイトの人生で最も集約的に多作な年であった。最も直接的で具体的な成果が、1900年に『夢判断』として出版された。フロイトは内容の主要部分に自分自身の夢を使っている。生涯を通して、彼はこの本が自分の最良のものと常に思っていた。

夢の意味を解明する上で、フロイトは、夢の顕在的な内容（起きているときに明らかになるもの）と潜在的な内容（ほぼ本当であるもの）の区別をしなくてはならぬと主張する。表面的には、夢はふつうまったくばかげたもののように思える。しかしながら、我々が表層下のものをつきとめるときには、まず、諸要素の内的なロジックを探る。大部分の夢は、日常生活の単なる残りかすにすぎないし、夢見る人が日常経験する共通の特徴であるにすぎない。しかし、我々が内的な文脈を探るときには、日常生活とは無関係に思える1つの中心テーマがつねに存在する。これは夢を生み出す欲動（impulse）を意味する。それは、禁じられた欲動（つまり、意識的には認められないもの）であることが最も多い。夢の中でさえ、それはより歓迎すべき文脈の背後にかくされているに違いない。しかし、それにもかかわらず、存在するのである（夢が全体として実現をかなえる抑圧された欲望、として）。

このような解釈のしかたが夢に対してに適用されるのか、より具体的にみるために「夢判断」から1つの小例をとりあげよう。1897年春、フロイトは、ある考えとそれに伴うイメージからなる単純な夢をみた。彼は、この夢を次のように要約している（フロイト、1900；再版 1953、137頁）。

I. 私の友Rは私のおじだった——私は彼に非常な愛情を感じている。

II. 私は、目の前で彼の顔をみた。いくらか変わっていた。それは、あたかも長く引き伸ばされたかのような顔だった。顔のまわりの黄色いあごひげは、とくにきわだっていた。

当時、フロイトは、ちょうど自分の名前が大学の非常勤講師の候補にあがっているのを聞いたところだった。そのような職（彼は事実、5年後に手に入れた）は、明らかに名誉なものである。かつそれは、彼に定期的に講義をもたせることを意味する。彼が夢をみた晩、友Rから訪問をうけた。彼の名前は、似たような立場にいたために以前から意識下にあった。この友は、フロイト同様、ユダヤ人だった。この晩Rは、R自身の職が、反ユダヤ感情のために妨害されているのを示すような調査結果を報告した。

最初フロイトは、自分の夢とこれらの事実とは関係がないと思っていた。その夢はまったくナンセンスであるように思われた。しかし、自分の患者もまたかくれた部分が最もあらわに出ている夢の多くをいかにナンセンスなものと考えていたかを思い出しながら、彼は追求しはじめた。「Rは私のおじだった」——これは何を意味するか。おじとは誰？ すぐにフロイトは、彼のおじジョセフを思い出した。彼はずっと以前に罪を犯した。フロイトの父は、彼は悪い人ではなくばか者なのだと言っていた。そして、夢の中には、Rと結びつけられるおじの特徴（あごひげのある長い顔）があった。

フロイトは、更に彼の犯罪人のおじと他の同僚Nとを関連づけてみた。彼もまた教授の職に推薦されていた。Nは、自分の場合は、（事実無根ですぐに取り下げられた）犯罪責任に関する前歴があるために、遅らされるであろうと述べていた。その意味が今明確になっ

た。フロイトがその夢を解釈してみると、彼のおじジョセフは、教授の職につけなかった2人の同僚を表わしているものであった。一方は、あまりにも単純な精神をもっていたし、他方は、犯罪の過去をもっていた。夢の中で、反ユダヤ主義がこれらのケースの一要因であると認めないことによって、フロイトは、自分自身のチャンスをより確かなものと感じることができた。

しかし、まだ説明されない夢の1つの特徴があった。なぜRに対して「非常な愛情を感じていた」のか。それは、必ずしもフロイトとおじジョセフとの関係にも、フロイトと友Rとの関係にもあてはまらなかった。また、その夢の基本的な潜在的な内容ともあわないものであった。フロイトが、このようなパズルを解きうる唯一の方法は、それが、夢の本当の解釈をかくすのを目的としている、と結論づけることであった。彼の夢は、自分のよき友に対する悪口を含んでいた。かつ、自分自身がこのことに気づかないよう、愛の感情が夢の一部につくりだされたのである(137～41頁)。

そういった意識界防衛の背後にあるものをつきとめることが、フロイトの夢判断の(実際は精神分析における全体的アプローチの)特徴であった。彼の仕事を知ったものはほとんど、このアプローチに非常に懐疑的になる。フロイトの答えは2つの側面から行われた。一方で彼は、もっぱら患者を治療するという仕事に熱中し、看者の納得する治療力を徐々につけていった。しかしまた、精神分析の懐疑論に対して、フロイトの答えをむしろ公表していく(つまり自分の考えを書くことに熱中する)ことも行なった。文を書くことで、彼は開拓者の仕事の一部を懐疑論の人々とわかちあおうと望んだのである。

今世紀になってしばらく後、『夢判断』に続いて、一般向けにまとめた『夢について』(1901)と、さらに3冊の本を出版した。それは、フロイトが無意識の動機の深層を調査したものである。『日常生活の精神病理』は1904年に出版された(もともと、その大部分は1901年に別の形で述べられている)。この本では、いいまちがいや書き違いのような兆候的行為を扱っている。それらは、夢と同様、根底にある無意識の動機をあらわしていると考えられるからである。おそらくフロイトの全著作の中で最も広く読まれたものだろうが、自分ではこの本を味もそっけもないぶざまなものと思っていた。1905年、他の2冊が出版された。『機知とその無意識との関係』と『性に関する三つの論文』である。前者はユーモアとジョークの表現や愉快な感情をあやつる強力な無意識力についての研究である。後者は、幼児期の性欲に関するフロイトの見解をはじめて体系的にのべたものである。フロイトは、『夢判断』をのぞけば、『性に関する三つの論文』を最も重要な本だと考えていた。

1905年までにフロイトは、精神分析治療の中心的な技法と精神分析理論の中心的な考えとをつくりあげた。その頃、精神分析の方法も理論も、あまり注目されていなかった。フロイトは、当時の心理学者や医者からかなり孤立した中で著述や医療業務を続けたのである。とりわけウィーンで、彼の考えと方法は、たいいてい無視された。もともとときどき、軽べつや皮肉でもって迎えられはした。しかしながら、ほんのひとにぎりの地方医ではあるが、フロイトの本に感動したものもいた。彼らは、自分自身の実践に彼の技術を応用しようとした。彼らは、毎週、フロイトの事務所ではじめた。それによって、精神分析運動の萌芽が生まれたのである。1908年までにこのグループの成員は約20人になっていた。ウィーン以外から集まった人々が、精神分析を世界の主要都市に広げべく接触をとりはじめたのである——ブタペストからサンダー・フェレンツィ(Sándor Ferenczi)、チューリッヒからカール・ユング(Carl Jung)、ベルリンからカール・アブ

ラハム (Karl Abraham)、ロンドンからアーネスト・ジョーンズ (Ernest Jones)、ニューヨークから A. A. ブリル (A. A. Brill) など——。

フロイトの心理学主義

ジグムント・フロイトが、当初いかに治療の方法やそれらの解釈——それらは、あわせて、精神分析として知られるようになった——を開発していったかをのべる過程で、彼の心理学に関する中心的思想の若干を示唆してきた。無意識的動機的重要性、抵抗と抑圧の過程、心理的葛藤における性的要因の一般的な重要性、さらに幼児性欲の特殊な重要性——これらは、1910年までに形成されたフロイトの心理学的解釈の中心的思想である。我々はここで、それらの思想をもう少し詳しく探ることにしたい。それらをフロイトの社会心理学の基礎として理解するために。

フロイトの心理学的解釈すべてに共通する中心点は、無意識的動機的重要性である。フロイトによると、「精神分析は、あらゆる精神にはまず無意識界が存在する、とみなす。そこには、“意識”以上のものがまた存在するかもしれない、逆に存在しないかもしれない」(Freud, 1925, 再版 1959, 31頁)、それゆえ、意識ではなく無意識の精神こそが、彼にとっては心理学の基本だったのである。フロイトは、催眠術による研究や、後自ら書いているように、「直接には何も知ることのできない欲動の発生率や力について」(31—32頁)の観察を通じて、早期にこの結論を導いた。個人の生活において行動をかりたてる力は、どんなにがんばってもあいまいにしか知ることのできない内的なシステムの中でおこっている、とみなさねばならないのである。

精神生活の基本的貯蔵器は、それゆえ無意識である。この一部は、感情的抵抗なくして、容易に意識の中にはいりこむかもしれない。この部分をフロイトは“前意識”(あるいは“先意識”)と呼んだ。しかしながら、無意識の大部分は、意識の中によびこむことはできない。この支配下にある行動はすべて抵抗か検閲にあう。この検閲は、フロイトによって前意識の中につねにあるとされたものである。無意識は、人間の極めて活動的な側面であり、元来、心理的経験の動因力をもたらす行為に対する奮起や欲動からなっている。広大な無意識界とは対比的に、経験の意識的な部分は、フロイトにとって、機能している人間の比較的小さな部分だったのである。

仕事ををはじめたころ、フロイトは、患者が過去の経験のある領域を探るときに示す強い抵抗に注目した。この抵抗の分析によって、彼は、“抑圧”(無意識界に対する経験の合目的委託)と、学問的に“抵抗”(そういった経験を無意識界にとどめておく)として知られることがらに関する理論をうちたてた。

我々の正常な精神生活では、即時的な欲動ともう一方の熟慮との葛藤が非常に多く存在する。この葛藤を通して、我々の欲動からくるエネルギーは、いくらか方向転換せられる傾向がある。しかし、ある場合には、この葛藤を自然のなりゆきにまかせるのでは耐えきれなくなる。その衝動は、非常に陰悪なために、その存在にきづかれはじめるやいなや、わきに押しやられねばならない。これが、抑圧の場合に起こることがらである。そういった欲動が後で意識の中に入りこまないよう、精神生活の正常なエネルギーの一部が、そういった欲動の受容に対する一定の防衛を用意するのである。これが、フロイトのいう抵抗である。しかしながら、抑圧された欲動は、そういった防衛反応によって消去されない。そうではなく、間接的な方法で表現され、ときどき人々が説明できない行動を導くのであ

る。ノイローゼは、そういった行動が個人の生活において、とくに目立っているときおこる。

フロイトの診察する患者が抑圧を強制されているように思えた内容は、多く、性的な記憶や心像からなっていた。まず、フロイトは、多くの患者の幼少期に、精神的外傷となるような性的経験を確認できると考えた。しかし、1900年ごろまでに、彼は、普通これらのことがらは現実にはおこっていないことを発見した。つまり、それらは患者の想像によってつくられるのである。この想像の源を跡づける中で、しかしながら、フロイトは何度も性的願望や欲望の重要性——成人にとってのみならず、幼児の初期の発達経験にとっても同様——に気づいた。このことが、フロイトを“リビドー (libido)” の理論構築へと向かわせたのである。リビドー、あるいは、性的エネルギーは、無意識の動機を貯蔵する人間貯蔵庫における2つの巨大な動因のうちの1つを構成する。他の1つは、自己保存のための動因であり、彼は、“エゴ (ego)” 動因とよんだ。これら2つの動因——結局は、それぞれ生命の生産と保存を目的としている——を、フロイトは、生物学的に与えられたものとみなした。エゴ動因は、リビドーよりもより理解の困難な問題である。というのは、自己—保存の欲求は、人が生きていくかぎり否定できないものだからである。しかしながら、リビドーを伴って、それは変化する。性的エネルギーは、直接使用されなくても起こりうるものである。事実、これはリビドーを伴う場合の典型である。エネルギーは、動員されるが、それは、どんな直接的触発も受け入れない。すなわち、エゴは、間接的な方法で表現させるところに、有用性がある。リビドーのこのような絶えまない変化が、フロイトの治療するノイローゼ患者によって体験された症状の主要な要因だったのである。

しかしながら、リビドーは、ノイローゼ患者のみならず、あらゆる人々の行動をまかりたてる。というのは、正常な行動と異常な行動を区別する明確なラインは存在しないからである。そして正常な発達の過程においては、リビドーが自らの表出を強制する仕方に、特有の発達パターンを認めることができる。これは一連の発達段階としてみなされるかもしれない。生まれた段階では、リビドーが、身体の様々な機能によって特別に組織づけられるわけではない。しかしながら、まもなく口の活動と特に関係してくる。つまり、口唇期である。この次が肛門期で、排泄や排便活動が中心となる。最後に、生殖器そのものが喜びの中心となる。だがこれは、まもなく深刻な葛藤を導く。というのは、性的関心の最も身近な目標——自分と異性の親——が、性的興味のもう1つの源泉となるからである。そこでは、性的刺激の組織的な抑圧がおこる。そして、フロイトのいわゆる“潜在 (latency)” の時期が生じてくる。この潜在期は、生殖器への興味の第2段階を導く。そして今度は、身近な家族外への表出を探るようになる。発達のあらゆる段階で経験される激しい葛藤は、次の発達に対して妨害となるかもしれないし、あるいは、フロイトのいわゆる“固着 (fixation)” の段階を導くかもしれない。次の段階に発達した後でさえも、以前に経験したのと同様の問題が、その段階の特異な忘我のために、再びおこってくるかもしれない——すなわち、フロイトのいう“退行 (regression)”——。そういった固着や退行を、フロイトは、自分のノイローゼ患者にみられる特定の共通項とみなした。

リビドーの概念をフロイト派の人々は、性としてふつうに認められるものより、より広いものとみなしている。事実、第1義的に直接の喜びに向けられた力であればすべて、リビドーと考えられるかもしれない。もっともフロイトは、一番適切な例として精神における性をのべているのは明らかだが。性的本能は、リビドーとしてひろく理解されてい

るが、最も形式的には、直接の満足感をもたらす“快感原則 (pleasure principle)”に従って作用するもの、と確認される。この快感原則は、つねにある生理学的システムにおける緊張の減少にむけて作用する。リビドーの快感原則とは対照的に、フロイトは“現実原則 (reality principle)”をのべている。それは、外部世界への適応を要求する。エゴの本能は、早期に環境の要求に適応することを学習しなくてはならぬ。それゆえ、それらは、リビドーよりも容易に、現実原則によって形づくられるようになる。性本能にとって、現実の形成はあまり直接的ではない。それらは、快感に対して一義的に方向づけられている。しかし、その快感は、また現実に対する適応を要請する。それゆえとくに性衝動に対して、その段階は、快感と現実のさけがたい葛藤——特に無意識の——を課すのである。この葛藤によって獲得するものが、精神分析が最も関心を寄せるパーソナリティ型やノイローゼ症状の第一の基礎となる。

結局、心的エネルギーに関するフロイトの理論は、生物学的基盤に基づいているのである。エゴ動因は、基本的には、生命を維持する方向に向けられる。性的動因は、基本的には、身体の快感を求める。エゴの動因力は生き続けるための単純な要求であるのに、リビドーのそれは、エロティックな満足にある。しかし、これらの生物学的な力は、心理学的に表出する。フロイトに従えば、これらの心理学的な表示は、全く決定されたパターンを示す。

フロイトは、哲学的に、決定論の立場をとった。これこそ、自分が確信できる科学的態度の必要条件と考えたのである。彼の第1の貢献は、無意識の心理学的動機が、いかにして、人間の経験を引き起こす決定条件となるかを示したことである。彼は、あらゆる行動は、心理学的に決定される——内的に引き出された動機によっておこる——とみなしたために、我々は、フロイトの見解を“心的決定論 (psychic determinism)”とのべることができる。人間の最もはっきりでたらめだとわかる行動でも——たとえば夢——フロイトは、強固にパターン化された方法で、無意識の心理学的力によって決定されるとみなした。それゆえ、たとえ意識的精神によって認識されなくとも、あらゆる行動に心的な原因が存在するのである。

フロイトの社会心理学

1913年と1914年に、フロイトは、社会科学の方向に、精神分析を移動させる新しい基盤を開拓した。さらに、彼がほとんど制御できない事柄がでてくるにつれ、彼はだんだんと、自分の理論に社会的意味づけを考えるようになってきた。

第1に『トーテムとタブー』がある。1913年5月13日——自分の仕事を終えた日——一、彼は、サンダー・フェレンツへの手紙で『夢判断』以来「こんなに確信をもって、かつ意気揚々」と行った仕事はない、とのべている (Robert, 1966, 299頁)。彼は、新しい基盤は、原初的な道德律や宗教に関する精神分析を行うことによって開けることをよく知っていた。想像を大胆に飛躍させて、彼は、未開民族の近親相姦回避やトーテム崇拜に関する人類学上のデータとエディプス・コンプレックスの心理学的力学とを結びつけたのである。呪術や宗教の儀式において、未開人が表現する感情の二律背反を、フロイトは、親に対する子どもの二律背反と直接的に重なりあうもの、と考えた。そして、双方から、性や攻撃の表出を制御するタブーが生まれるとした。フロイトは、大胆にも、次のごとき提案を行った。すなわち、有史以前の大昔、自分の息子によって、家長が殺されるというで

き事があった。そこで、殺人や近親相姦に対するタブーを作って、良心の呵責を制度化したのである、と。フロイトは、そういったことが、初期の原始集団で実際にあったかどうかは別にして、親との同一視に向けられる心的努力を、道德律や宗教の原初的——親に従うことで、教化される——システムの基礎とみなした。

フロイトは、『トーテムとタブー』の中で行った大胆な主張はおそらく精神分析運動の分裂に油を注ぐだろうと思っていた。しかし、彼は、そのための用意はしていた。いつのまにか、アルフレット・アドラーやカール・ユングは、フロイトの見解とはかけはなれたものを徐々に示すようになった。1914年、ついにかつての弟子が2人とも去ってしまった。どちらも、リビドーの理解が、論争の中心であった。アドラーは、リビドーの概念をひろげて、社会生活上のほとんどの活動的な競争に広く適用したかったのである。ユングは、さらに、ほとんどあらゆる生活のエネルギーに応用できるほどに、その概念を拡大したかったのである。ユングは、とくに、リビドーはたいてい外的対象から撤回されるかもしれないとし、もし、他の生命力と本質的につながっていなければ、リビドーはいかにして存続しうのか（できないはずだ）、と指摘した。対抗上、フロイトは、リビドー理論に制限を加えざるをえなかった。リビドーは、事実、外的対象から撤回するかもしれないし、エゴに集中するかもしれない。この自己陶醉の理論は、『トーテムとタブー』の中で示唆され、翌年、より明確にうちたてられた。しかし、いくつかの理論的問題が未解決のままだった。リビドー動因とエゴ動因とは、もはや単純な二元性ではなく、まだ十分に説明されない方法で絡みあっているのである。

そのとき、1914年にまた戦争となった。戦争が始まると、フロイトは、愛国的熱情をかきたてられた。オーストリアーハンガリー連合軍は、(彼がそのときいったように)自分のリビドーそのものだった。彼は、戦争のおこったはじめの数週間、3人の息子が軍隊務めを志願したのを誇りに思った。しかしながら、2、3カ月の間に、フロイトの見通しは深い悲しみを伴うものにかわった。それは、戦争の間中ほとんど、彼の心についてまわった。自分の身近な家族や研究仲間に対して、この戦争は、不自由な歳月をもたらした。そしてまもなく、自分の娘と、とくにかわいがっていた孫息子が折悪しく死んだのである。その後1920年にフロイトは、『快感原則の彼岸』の中で、自分の本能理論の大幅な修正を行った。

この新しい公式表示では、“リビドー”という用語を、生命を支え形成するのに役立つ広い範囲のエネルギーにも適用させている。自己保存(エゴ動因)の本能と種の保存(性動因)の本能は、今や“エロス(eros)”という1つの全体にわたる生命力と結びつけられた。エロスは、生命を支える欲動的能量の全体である。それはなお、快感原則によって引き起こされる(かつ、現実原則によってチェックされる)としても、リビドー的快感の有機的基础が、今や以前よりもより広いことばで概念化されたのである。もはやそれは、本質において第1義的に性的である、というのではなくなった。事実、本能の観念を、「生きものの一種の伸縮性、つまり、かつて存在したが、ある外的な妨害によって終末をむかえた状態を復元しようとする欲動」(フロイト、1925; 再版1959, 57頁)として、より広く概念化している。本能の性質に関するこのより広い概念化は、フロイトが、死や破壊への欲動を、もう1つの基本的本能とみなしたため、と認められる。この死の本能——すなわち、彼が“タナトス(thanatos)”と名づけたもの——は、“涅槃原則(Nirvana Principle)”に従って作用する。その原則は、無の状態を捜し求める。死の本能との戦いは、

死そのものである絶対的無に向かっている。我々が生きていたときの生活は、つねに生と死に関するこれら2つの基本的本能の表出を含んでいる。フロイトが、それを表現しているように、「人生が我々に示す絵図は、エロスと死の本能との一致した行為と相反した行為との結果である」(57頁)。

本能理論の再構成に従って、フロイトは、イドとエゴとスーパーエゴの3分割を含む、パーソナリティの整然たる理論をうちたてた。これは、『エゴとイド』(1923年)の中で、はじめて体系的にのべられた。イドは、原初的エネルギーの完全な無意識界の貯蔵庫である。エゴは「外界の直接的な影響によって修正されたイドの一部」である(フロイト, 1923; rpt. 1961, 25頁)。スーパーエゴは、意識とはあまり強固には結びついていないエゴの一部である。それゆえ、ある目的のためには、それは別個のシステムとして扱われるかもしれない。スーパーエゴ——「我々の親に対する関係を代表している者」であり、「エディプス・コンプレックスの相続人」(36頁)——は、幼児の性的葛藤を解決するためにエゴによって開発される。両親に愛着され、異性の親に特別な方法で性的に引かれながらも、幼児はこの誘惑を結局はあきらめる。同性の親と同一視することで、子どもは、一種の代理的満足を獲得する。この一連の経験から、子どもは、両親の文化的理念を理念の手本として受け入れる。そして、ほとんど無意識的な方法で、それらを肯定するようになる。

“同一視”の過程は、社会力の内面化を用意する。フロイトのことばによれば、「同一視は、ある人自身のエゴを、“モデル”とみなされる人の様式に従って鑄造しようと努力する。」(フロイト, 1922, 63頁)。子どもは、自分の心に、外的に経験した形をつくり出す。それ故、心理学的方法においては、まわりの人々が、それらの外的対象となる。これが、フロイト特有の社会心理学の中心理念だといってよからう。

フロイトに従えば、最も基本的な同一視は、両親とのものである。たとえば、非常に初期に、男児は、自分の父に特別な興味を示し、彼のように行動しようとするだろう。父とのこの同一視に従って、母への性的結びつきが生まれてくる。フロイトは、これを同一視よりむしろ“性対象—カセクシス”(外的対象へのリビドー動因による愛着行動)とよんだ。しばらくは、父や母へのこれらの結びつきは、両者とも並行して存在する。しかしそれらは、長い間離れていることはできない。おそかれはやかれ、男児は、自分の父が母への願望(充足)に有利な立場にいることを知る。彼はその時、母に対する愛情と同時に、父への憎しみをかきたてる。このエディプス状況(ギリシャの悲劇の英雄、エディプスの生涯と似ているために、フロイトがそのように名づけた)は、典型的には、父との同一視を強化したり、母への性的興味をより社会的に受け入れられる形に転移させることで、解決される。これと同じような解決策は、母への同一視が強いとき、女兒にもおこる。どちらの場合も、フロイトが、スーパーエゴと呼んだ一連の観念や抑圧がエゴの中に生じてくる。そして、あらゆる随伴的な社会的相互作用や自己—評価に影響する。このスーパーエゴは、重要性の度合に、かなりのバラつきをもって形成されるかもしれない。それは、子どもが、この初期の葛藤状況における相反する傾向をいかに解決するかにかかっている。

後の同一視は、これらの初期の同一視によって大部分理解される。というのは、フロイトによると、これらの初期の同一視のみが、構造的にスーパーエゴを具体化するからである。しかしながら、他の様々なものも、両親との一次的な同一視の代理として役立つかもしれない。これは、本質的にフロイトが社会集団を形成するときおこっているとみなしたものであり、『集団心理とエゴの分析』の中で論じたものである。

集団心理の分析において、フロイトは、ギュスタブ・ル・ボン (Gustave Le Bon) の群衆行動研究を出発点とした。彼は、かなり無批判的に、ル・ボンの分析をうけ入れた。というのは、それが、発達段階にある集団は一義的に感情的結合に根づいている、とみなそうとするフロイトの目的に適するからである。彼は、さらにこれらの結合の性質と起源を明確にしようとした。典型的な集団——はっきりとしたリーダーがおり形式的な方法で特別につくられたものでない——において、何が本質的に起こるかといえば、リーダーが一時的に感情志向の共通の対象となることである。そして、スーパー・エゴを形成した親との結びつきの代理をするのである。集団成員が、リーダーをスーパーエゴに代えようとするとき、彼らもまた、フロイトの用語をかりれば、「お互いのエゴの中で、相互に同一視しあう」(80頁) ののである。

さらに彼が集団の性格とみなした特徴 —— 「知的能力の弱化、感情抑制作用の欠如、節度や猶予の無能力、感情の表出においてあらゆる制限を越える傾向、行為の形でそれを完全に放出する傾向」(81-82頁) など——を理解するために、フロイトは「群居本能 (herd instinct)」について論ずるのが有効であると考えた。実際に、彼は、そういった傾向を、遺伝的に与えられたものと仮定する必要はないと考えた。そのかわり彼は、子ども同志の初期の競争を指摘し、そのとき感じる嫉妬が、共通の集団感情の中で変形させられるとした。この変形は、集団生活を通して発達する後の集団の協同精神及び平等やフェアプレーの規範に対する基礎となる。フロイトは、この過程についての綿密な理論的検討はしていないが、彼が心に思っていることを、あざやかに言い表わしている。彼はいつている。若い女性が、演奏の後、ピアニストやシンガーのまわりに殺致するのに注目せよ、と。見方によれば、彼女たちは、彼の注意をひこうとする点でライバルである。しかし、お互いに髪をつかみあうかわりに、彼女たちは、一体となった集団として行為し、共通の行為でもって、その場のヒーローに敬意を表し、そして、おそらく彼のたれ髪をわちあうのを喜ぶであろう (87頁)。いいかえれば、彼女たちは、幸せにもお互に自分自身を同一視し、分けもたれた愛情の対象に対し、共通の指向を許すのである。これは、フロイトが示唆しているごとく、基本的には、効果的なリーダーシップや好ましいモラルをもつほとんどの集団においておこっていることである。

親の代理と子どもの競争の変形による集団過程の解釈を補足するために、フロイトはさらに、人類の歴史の中に、後、家庭内で観察される特徴的なできごとの原型を探しはじめた。以前『トーテムとタブー』で、彼は、「原初的群衆 (primal horde)」(フロイトが、チャールズ・ダーウィンの著作から引き出した集団生活のオリジナルな形態についての概念) の中でおこることがらに関する理論上の取り扱いを論じた。そして、宗教やモラルの規範形成に関する段階を設けたのである。『集団心理とエゴの分析』の中で、現在の集団もまた、この原初的群衆の遺物を含んでいる、という論旨を再びとりあげた。彼は、原初的群衆の性質と、随伴する集団生活の中でその特性がいかに再生されるか、研究した。集団の指導者は、たとえば、つねに恐れられている父祖の内実のいくらかをひきうける。集団は、なお、権威に対する強い欲求をもつ。要約して、フロイトは言っている。「父祖は、集団理想である。それは、エゴ理想にかわってエゴを統治する」と。すなわち、父祖は、個人がスーパーエゴの中に、両親の良心を所持するのとよく似た方法で、集団生活を送った遠き世代の人々の良心を所持する (99-100頁)。

フロイトは、かなり粗雑に集団生活の非理性的な力を描いたが、個人は集団加入によっ

て、まったく受身的に一掃されてしまうのではないこともまた認めている。彼は、集団への加入が、包絡される個々人に制限を加えたり、区別をつけることを認めていた。各個人は、多方面に集団との結びつきをつくる。そしてそれらは、自分のパーソナリティに均衡を保つ助けとなる。さらに、安定した集団への加入は、パーソナリティの安定への基礎をつくる。即座に形成された群集がおこすとはうもないできごとの中でのみ、我々は、これらの内的な力を行使する集団の圧力を感じるのである。というのは、こういった場合、この圧力は、一時的な表出の中では比較的抑制されないからである。事実、そういう一時的な集団での我々の状態は、催眠と非常によく似ている。ただ群集行動は、リーダーに対してと同様、仲間の個々人全体に対する同一視を含むという大きなちがいはある。どちらの場合も、はっきりと自己一指向的な個々人（実際は多くの、しかしよくバランスのとれた社会的同一視の産物）に、即座の状況を有利に支配する方法をさずける。

社会と生物学

1923年、フロイトの口にガンが見つかった。そのとき、手術でその進行をくいとめたが、フロイトはその後ずっと、苦痛なく食事や話しをすることができなかった。それ以来、彼は食事をすべてひとりでとったし、他の講演を行うことも決してなかった。数年後、彼のガンは再発した。さらなる手術にもかかわらず、1939年9月23日死亡した。ところは、イギリスのロンドンであった。そこは、ヒットラーがオーストリアのアンジョレスとの合併を行った際、亡命者として数年前移住したところである。

病気や苦痛にもかかわらず、フロイトは、83歳の生涯のほとんどを、生産的な学者として過ごした。事実、文化の心理学に関する最も有名な業績である『文化とそれへの不満』を、1930年の終わり頃に出版している。この著書の主なテーマは、本能の要求と文化の要件との間の避けられぬ葛藤についてである。フロイトは書いている。「文化は、本能の放棄の上に成立することや、程度の差はあれ、強力な本能の非満足（抑圧、制圧あるいは他の手段で）をはっきりと仮定しているのを見のがすことはできない」（1930、再版1961、97頁）。この2つの重要な例は、愛と憎しみに対する欲動、つまり生と死の基本的本能の中心的表出を意味している。

フロイトは、愛について2つの主要な形態をみ出した。全く肉欲的な愛、すなわち生殖器のみの愛、と「目的一抑圧的」な愛、すなわち愛情とである。これらは双方とも、文化の利益とは、必然的に対立することになる。性欲は、家庭生活を保持するために抑えられねばならない。フロイトにとっては、この欲圧は、避けられないものであるが、しかしなお、現在の状況は、いくらか極端であると考えた。フロイトは、男女がより少なく限定された性的規約でもって、はるかに多くの幸福がえられることを確信していた。

単純な愛情（すなわち、目的一抑圧的の愛）は、また個々人の幸福とは別の目的に役立つよう、文化の力によって変形させられる。というのは、文化は「地域の結びつきを強めるために、最大限に、目的一抑圧的のリビドーをふるいおこす」（109頁）からである。こういった集団同一視の過程は、以前、集団心理学に関するフロイトの分析の中で論じられたものである。

もう1つの中心的な動因は、攻撃に関するものである。フロイトにとって、これは死の本能が最も明白に表われたものである。人間の攻撃性向は、もちろん文化を構築するという点からいえば、撃退されねばならない。これは、反社会的行為の統制という形での

みおこるのではなく、攻撃欲動の内的欲圧をも要求するのである。この過程の一部として、攻撃が、スーパーエゴの中に内面化され、くみ入れられる。すなわちそこでは、罪の意識として内部転換する。この方法で、文化は「個々人の内部に潜む危険な攻撃願望を支配するために、それらを弱めたり武装解除したり、さらにはそれらを監視するために、——征服された都市の占領軍のように——個々人の内部に監視人をおいたりするのである」(123～124頁)。そういった罪は、文化が攻撃を統制するためには必要であるかもしれないが、個人的な幸福追求にとっては、まったくの痛手となる。にもかかわらず、フロイトは、そういった罪は、ほとんど文化の発達のために避けられぬ副産物であると考えた。そこでは、文化が我々に課す罪の重荷から逃れられないように思える。我々には、それゆえ、「不確実性に悩まされながら、かつ絶えまなき探索を続けながら、我々の道をみつける」(33頁)ことが残されている。苦悩がとくに深刻な人の場合には、精神分析はいくらかの助けになるかもしれない。フロイトが精神分析療法についていたるところでのべている公式※に従えば、エゴは、避けがたい内的葛藤の状況をより効果的に乗り切るようにいられる。しかし、その葛藤はなお残っている。文化がそれを要求するからである。フロイトによれば、「我々が文化の進歩に対して払う代償は、罪の意識を強化することによって幸福を失うことである。」(124頁)。この罪は「無意識の大部分に、一種の不満足として表われ、人々は他の動因を捜し求めるようになる」(135～136頁)。しかし、それにもかかわらず、それは、我々の心理学的性質に関するまったくリアルな部分でもある。

『文化とそれへの不満』におけるフロイトの綿密な論述の中で、彼は、わずかながらも希望の部屋をみつけた。文化の発達は、おそらく、今日知られているものより、個人の幸福の直接的な抑圧をより少なくする方向へむかうかもしれない。個人と社会の対立は(現実にあるけれども)、生の力と死の力の間にある内的な闘争と同様の基本的で生物学的な源泉をもっているものではない。それゆえ、少なくともより理想的な「文化的スーパーエゴ」が、将来我々の罪の意識を集約的に組織化するかもしれない、と考えることができる。文化的スーパーエゴ(すなわち、——フロイトもまたさまざまにそれを名づけたのにならって——コミュニティあるいは、文化のある時期のスーパーエゴ)の概念は、フロイトが、最初に『文化とそれへの不満』のおわりのページでのべた理念である。彼はそこで、社会の倫理的価値体系について言及した。そして、この集合的なスーパーエゴを、個人のスーパーエゴのアナロジーとして(しかし区別して)考えた。フロイトは、このとき文化の分析にも同様の興味をもっていたが、彼自身の業績に関する限り、そういった分析は、未発達のままだった。フロイトに従った精神分析家達——とくに「新フロイト派」とよばれるアブラム・カーディナー(Abram Kardiner)やエーリッヒ・フロム(Erich Fromm)カレン・ホーナイ(Karen Horney)が、精神分析理論を拡大したのは、まさにこの方面においてである。

精神分析が発達するなかで、いつも中心的論点となっているのは、行動を理解する際、比較上の強調点をつねに生物学的に与えられた力(force)においていることである。最初、精神分析は、生物学的に与えられた一定のさしずに従わないケースを論じあった。ヒステリーのような神経症は、基本的に器質的原因によって決定されるのではなく、心を乱

※その意図は、もちろんエゴを強化することであり、スーパーエゴからより独立させることであり、知覚の領域を広げ、その組織を拡大することである。その結果、イドの新しい相続分が割りあてられるのである(フロイト、1933、再版 1964 80頁)

された社会的経験の産物であった。しかし、フロイトによれば、この心を乱された経験を理解する鍵は、それ自身生物学的に決定された内的な力の性質の中にみい出されねばならない。それゆえ彼は、生物学的決定要素と社会的経験との間を調停する基礎として、本能の理論（最初は、とくにリビドー、後、より一般化されたエロスやタナトス）に避難所を得たのである。社会は、これらの欲動の表出がどんな形態をとるかに影響を与えるかもしれないが、これらの基礎——基本的な推進力や表出の主要な方向——は、生物学的要求からひきだされる。

本能に関するフロイトの理論は、おそらく、精神分析運動の論争のうち最も議論の余地のある問題である。アルフレッド・アドラー (Alfred Adler) や カール・ユングが、初期に学派から去っていった原因は、第1にリビドーの解釈にあった。アドラーは、劣等感情に打ち勝つ力の動因に非常な力点をおいた。彼にとって、これは、性欲より以上に神経症状の原因を解明する鍵であった。ユングは、リビドーについてのべてはいるが、そのことを生活エネルギー全般を意味するものに拡大した。彼は、“より高次”の動機に対し、フロイト以上の力点をおいた。そして、そのいくらかは、無意識的な心理的過程に根ざしていることをみい出した。フロイトが、そこに性的欲動や攻撃欲動をみい出したのと同じくらの確信をもってである。フロイトが、後に開発した理論の一部は、アドラーやユングの初期の反論に対する説明と受けとれる。パーソナリティの3分割を強制するエゴをとりわけ強調したのは、少なくとも、アドラーの強調点と同じ一般的方向にあるといえる。そして、フロイトが、エロスやタナトスに関して、本能理論を修正したとき、リビドー概念を拡大したのは、ユングの方向に傾いたことを意味する。しかしその亀裂は、すでに生じていたのであり、以後ずっと続いたのである。

フロイトの本能理論は、さらに、一般に“新フロイト派”と呼ばれる精神分析のその後の流れに属する人々の間の中心的な論争点となった。カレン・ホーナイ、エーリッヒ・フロム、ハリー・スタック・サリバン (Harry Stack Sullivan) やアブラム・カーディナーはお互いに強調点は違っていたが、しかし、いずれもが、フロイトの本能理論は行動の社会的変数を論ずるのに不十分であることを明らかにした。彼らにとっては、フロイトの理論は、個々人の立場から、非常に限定してうちたてられており、個々人は欲動の比較的固定したパターンで動かされているというとらえ方をしている。対照的に、彼らは、人間は固定した動因をもって生まれてはこないと主張する。クララ・トンプソン (Clara Thompson) (1950, 142頁) がこの点についてのべているように、「社会は、人間と対立するものではなく、人間、とりわけ創造的な人間によって、同時に創造されるものである」。社会は、このような見方をすれば、人間行動によって状況が常に変化するという関係の中で、常に成長する状態にある。それゆえ、フロイトが、初期の子どもの社会化のために避けられぬ状態と考えたもの（たとえば、良心の発達の動きの中に位置づけられる初期の家庭内競争）は、実際は、はるかに変化に富むものであった。事実、おそらく、彼の観察したものは、たいてい大ざっぱに、典型的でない家庭生活の例を基礎にしていたであらうし、あたかも一般に人間性を代表しているかのような後期ビクトリア時代のウィーンの中産家庭の厳しさや抑圧を扱っていたといえよう。フロムが示唆しているように、両親の権威への適合は、あらゆる社会において必要である。しかし、これは、フロイトが彼の患者に最も共通にみいだした性的抑圧の特殊な型や親にかわる人との同一視をほとんど要求しはしない。むしろ新フロイト派は、我々は、フロイトが知覚した以上に、パーソナリティのより大き

な可塑性を認めねばならないとする。それは、人々を形成する社会がより大きな可塑性をもっているという考えに反映しているのである。

新フロイト派は、フロイト派の精神分析の中心理念を続けて使用した。彼らは、たいてい無意識的な感情力の中心性、抑圧や抵抗の力学、さらに幼児経験の重要性を仮定していた。彼らはまた、フロイトの貢献の中心である精神療法、とくに自由連想、夢判断、それに転移の用法を実践し続けた。しかし、これらの精神分析の特徴は、実際、本能の理論とのからまりなくしてまとめられるだろうか。フロイト派の有能な人々は、今日何もいわない。本能の理論や、この理論が基礎にしている有機的緊張の還元に関する基本的な概念を抜きにすることは、精神分析の精神そのものをないがしろにすることである。これにこたえて修正主義者は（たいていの社会心理学者とともに）、フロイトの個人を中心とした、かつ生物学を基礎とした欲動は社会経験を組織化する基礎として不十分であると主張している。人間の自我の性質そのものが、フロイトが概念化できたよりも、より完全に社会的文化的なものである。

おそらく、多くの修正主義者は、社会行動の中心力学を公式化する別の方法が、フロイトの使用したものより、より有効であると感じているだろう。かつおそらく、この代替的方法の筆頭に、ジョージ・ハーバート・ミードの理念を見い出すだろう。

高松短期大学研究紀要

第 11 号

昭和56年3月1日印刷

昭和56年3月10日発行

編集発行

高松短期大学

〒761-01 高松市春日町960

印刷

新日本印刷株式会社

高松市木太町2158